

[エッセイ]

## 私たちのドイツ留学体験記

### 1. 新免昌弥：東北大震災募金活動にも尽力 ——ゲッティンゲン大学

私は2010年の秋からドイツのゲッティンゲン大学に1年間交換派遣留学をさせていただきました。留学時代、1日のうち1時間でもドイツ語を勉強する時間を確保するために努力しました。無理をしてやめることがないように、私は早起き早寝をすることで1日のリズムをつくりました。早朝に小1時間ほどジョギングで体を起こし、そのあと朝食をとり、学校の図書館へ遅くても9時半までには着き、授業がない間はずっと図書館で勉強しました。夜は10時過ぎまで図書館にこもり、へとへとになって帰るとすぐに就寝しました。このように無理矢理リズムをつかったことで、ただだと過ごす時間が一切なくなりました。このように最初の6ヵ月を過ごした結果私のドイツ語は留学前と比べてかなり向上したように思います。

ゲッティンゲン大学にはエラスムスといわれる多くの外国人留学生がおり、彼らと積極的に文化交流をしたこともまた私のドイツ語向上の理由の1つでもあります。それから私はドイツでサッカーをしていたので、サッカーを通じてドイツ語を学ぶこともできました。さまざまな場面からドイツ語に触れることができ、とても良い経験ができました。

また、2011年3月11日に日本で起こった東北地方大震災に対して、小さな町にいる私たちにもできることはないかとゲッティンゲン在住の日本人学生が中心となって募金活動を行いました。私はリーダーの1人となって募金活動が成功するように尽力しました。そのなかで様々なことを学びました。まず何もないところから一から何かを作って形にしておくということの難しさを知りました。指揮をとる側に立ってみるとよく

分かることなのですが、募金活動に参加してくれているのにもかわら  
ず、自発的に動くわけでもない人をどのように動かし働いてもらうか  
という事は活動の最後まで私たちの課題でした。それでも募金活動は大  
成功でした。私たち手作りの折り紙や、日本の物を販売し、その売り上  
げを全て募金するという方法が良かったと思います。募金活動を通じて、  
私はこれから日本のために何かできないかということ強く思うよう  
になりました。

海外にある程度長く住んでいると、日本にいる時よりも日本あるいは  
日本人がどう思われているのかということに対して敏感になりました。  
それによって自然と日本について考える時間が増え、留学前よりもは  
るかに日本のことが好きになりました。このことは私自身にとって大変  
重要なことで、以前はほとんど無関心であった日本の政治や環境問題に  
ついて積極的に勉強したいと思うようになりました。

もうひとつ留学で得たもの、それは外国の友だちです。この1年間で  
本当に素晴らしい友だちに多く巡り合えたことで、ドイツでの生活は本  
当に楽しかったです。そのなかでも1年間ルームシェアでともに生活し  
た友だちは家族のような存在になりました。そして多くの外国人たちと  
交流していくなかで思ったこともありました。それは外国人に日本のこ  
ともっとよく知ってもらいたいということです。私の友達(多くはヨー  
ロッパの人たち)は日本のことは知っているけれど、しかし彼らが知  
っているのは彼らの中の日本に対するイメージだけでしかなく、間違っ  
て認識していることも多くあったからです。その時は私自身も勉強不足で、  
なかなか日本のことをうまく伝えることができませんでした。ですから  
今後の私の目標は、もっと日本のことを勉強して海外の友だちに伝え  
ていけるよう努力することです。うまく伝えることができれば私の語学  
力もさらに向上させることができるでしょうし、日本の素晴らしさも正  
確に理解してもらうことができるはずだからです。

また私は学校が休みの日を利用してヨーロッパのさまざまな所を訪れ  
ました。そこでまた良い友だちと知り合い、素晴らしい景色を眺めたり、  
その土地の食べ物を食べたりと、日本では決して経験できないことを知  
ることができたことは今後の私の人生にも大きく影響してくると思  
います。なぜならこのような経験ができたおかげで、私は海外と日本をもっ

と身近なものにしたいと思うようになり、将来そのような会社で働きたいと決心したからです。ですからいつか機会があればまた世界中の友だちを訪れ、自分のまだ知らない経験をしてみたいです。

## 2. 三木ありさ：わかりあえた時の喜び — ゲッティンゲンでの留学生活

日本を離れ留学の地ドイツに降り立ってから、もうすぐ半年になろうとしている。やっと生活に慣れ落ち着いた頃には二カ月がたっていた。その間に、住民登録、銀行口座開設やビザ取得に悪戦苦闘しながらもどうにか生活基盤を整えた。

留学前に具体的な目標を立て、体験したいことや知りたいことなど全て書き出していたノートには、感想や結果が書き足されている。こちらにきて常々感じることは、私も含め日本人は積極性に欠けているということである。欠けているというより、他国の学生がアジア系の学生に比べ積極的であると思う。彼らからいい刺激を受け、なんでも発言すること、何事に対しても自分から動くことを学んだ。そのおかげで様々な国の友人ができ、ドイツ以外の国々にも興味がわいてきた。友人を訪ね隣国に旅に出たり、互いの国の料理を作り合ったりと、毎日新しい発見の連続である。またこちらで異文化を体験する度に、自国と比較し日本という国を客観的に見るができる。これは日本から出ないと気付けなかったことのため、この留学の大きな成果になると感じている。またこちらに留学している人は、英語はもちろんドイツ語も流暢に話す。ドイツ語を学ぶ授業なら理解に苦しむこともないのだが、専門の授業では、スピードが速くついていけない時が多い。後期に備え、タンデムパートナーや友人と交流し、ドイツ語を使う機会をさらに増やそうと思う。

渡独してから自分の成長が感じられず悩んだ時期もあった。ただ単語量を増やすこと、がむしゃらに話そうとするだけでは伝わらない。母国語で沢山言いたいことはあるのに、それをドイツ語で言えないもどかしさを今も毎日感じている。しかし伝えようとする気持ちがあれば、聞いてくれよう、わかってくれようとする。それを特に感じるのは、同じ寮

のスペイン人の留学生との会話の時である。彼女とはいつも拙いドイツ語で伝えようと必死になる。一度会話が始めると、お互い理解するのに何分もかかる。しかし、わかりあえた時の喜びは言葉では言い表すことができない。今では、一緒にご飯を作り、散歩に出かけたりと毎日なにかしら一緒にしている。お互いのドイツ語も出会った頃より上達していると思う。落ち込んでいる時は励まされ、楽しい時間を共有できる友人ができたのは、私にとって本当に嬉しいことであった。語学面やカルチャーショックで悩んだ時も、明るく振る舞い励ましてくれる彼女がいたからこそ、今も頑張れているのだと思う。留学での沢山の人の出会いに本当に感謝している。

また、現地で実際ドイツ人と触れ合い、わかったことが沢山ある。文化の違いはもちろん、考え方や振る舞い方など実際に体験してわかった時には、留学して本当に良かったと実感する。ゲッティンゲンは「学生の街」とよばれるほど学生が本当に多く、勉強に専念するにはもちろん、小さく暮らしやすい街である。図書館にこもって勉強するだけでなく、街に出て買い物することも、私にとって有意義な時間である。というのも、私の興味のあるビオ製品やドイツパンが溢れているからである。ビオ、環境先進国のドイツでこれらが実際どのように人々に受け入れられているか興味深い。関心のあるこれらのことについて色んな人に話していたため、何人かからさらに知識を深められる場所や本、情報などをもらうことができた。後期は専門の授業を中心に、実際に自分の目で見、体験しないとわからないことにさらに挑戦していこうと思う。帰国までの間、できること全てにチャレンジし留学生生活を誰よりも楽しみたい。

### 3. 北垣 里那：交流でドイツ語上達——ケルンでの生活

2011年8月からケルン大学に留学している。8月はケルン大学の夏期語学コースに参加し、9月以降は交換派遣留学生としてケルン大学で学んでいる。

8月は日本人1人だったためドイツ語漬けの毎日だった。またホストファミリーでの生活だったので、日本語は一切使わない生活だった。こ

のような環境にいたため、外国人の友人も出来、ドイツ語もかなり上達した。授業では毎日ドイツ語に苦しめられた。日本でもっと勉強していたらよかったと思った。ドイツ語に苦しめられている時に助けてくれたのは友人であった。友人はドイツ語ができない私のためにゆっくり説明しながら会話をしてくれた。そのおかげもあり、8月下旬には友人の話す内容を理解することができた。また学校のプログラムとして遠足があったため、ここでの交流がドイツ語上達へ結びついた。プログラムは半日の場合もあれば、丸一日の場合もある。丸一日ドイツ語を話せる環境はそう多くない。

9月は留学生対象の語学コースに1か月参加した。平日は毎日3時間ドイツ語の授業がある。1クラスの人数は約30人で、8月と比較したら2倍ほどの人数だ。ここでも新たに友人ができた。また寮が学生村のため、友人のほとんどが同じ寮に住んでいる。そのため授業後にはパーティーに行き、ドイツ語を話す生活をしていた。私の寮の中にはバーもある。また時間があればホストファミリーを訪問し、ドイツ語で会話をしていた。

10月以降は正規学生対象の授業および留学生対象の授業に参加している。授業に参加して感じたことがある。ドイツの学生は積極的に発言する点だ。自分の意見を自ら述べる人が多い。たとえドイツ語以外で意見を述べるにしても積極的に発言する。そのため私は積極的に発言する必要性を授業中にいつも感じている。

友人から日本について質問された際に、答えられないととても悔しい思いをする。自分は日本人なのに日本について詳しく知らない。日本学科の学生のほうが日本について認識している。よく友人から日本は素晴らしい国だと言われる。その度に喜び、日本人であることに誇りを持つ。しかし日本の歴史、言葉の意味を熟知していなくて本当に日本人なのか疑問に思う。

冬学期は勉強の他に旅行をしていた。ケルンは交通の便がよく、フランス・オランダ・ベルギーへは直通の電車がある。旅行をして感じたことであるが、それぞれの地によって雰囲気は全く異なる。たとえばベルリンでも西側は栄えているが、東側はさびれている。ローテンブルクはケルン等の近代的な街とは異なり、歴史にあふれた街である。また他の

国を訪れる度にドイツの治安の良さ、住みやすさを感じる。ケルンの場合、市内の交通の便もよく、金曜日・土曜日であれば深夜でも毎時間電車およびバスがある。他の街、国を訪れる度にケルンの良い面を見ることができる。またケルン近郊の街ブリュールには「アウグストゥスブルク城」の世界遺産があり、ケルンに住むだけで「ケルン大聖堂」と合わせて2つの世界遺産を楽しむことが出来る。

ドイツに来て自分自身変化した点がある。それは意見をはっきり言うという点だ。日本では曖昧な返事をしてでも受け入れられるが外国では受け入れられない。自分の考えていることをはっきり言うようにしている。またドイツでは嫌なことは嫌とはっきり言う必要がある。嫌なことでも曖昧な返事をしていると、相手は良いことだと勘違いする場合がある。

あと留学生活も残り6か月。夏学期ではゼミを履修し、自分に挑戦したい。ドイツ学の講義も履修したい。留学生対象の授業のみでなく正規学生対象の授業を多く履修したい。まだドイツ語が上達したという実感はない。だからこそ春休みはドイツ人のホストファミリーでドイツ語を話し、寮では他国から留学している友人と英語を話す生活をする。タンデムパートナーとも会話をし、日本の文化を教えるだけでなく、自分自身も日本の文化を再認識したい。またドイツ文化と日本文化の比較をしたい。人との交流を大切にし、他文化を学び、旅をする。8月のようなドイツ語漬けの生活を取り戻したい。帰国するまでには自分でドイツ語が上達したと実感したい。またその価値を得られるだけの努力は怠らないようにする。長期でドイツに滞在できる残り少ない時間を楽しみ、悔いの残らない有意義な留学生生活を過ごせるように頑張りたい。

#### 4. 近藤 美菜子：日本から外の世界に踏み出す第一歩

私は2010年の9月から2011年の7月までの約1年間、ドイツのゲッティンゲン大学で留学生活を送りました。留学初日、初めての外国での生活に大きな不安を覚えながらゲッティンゲンに到着した私は、ドイツ語でも英語でも周りとうまくコミュニケーションをとることができない自分自身に絶望し、その数日後には日本に帰ろうと考えるようになってい

ました。そのとき私は完全にホームシックに陥っていたのです。しかし、様々な国から来た人たちとお互いに意思疎通をはかる努力をする中で私の心に変化が生まれました。「たどたどしいドイツ語しか話せなくても、知り合った人たちともっと楽しく会話をしたい！」と思うようになったのです。そして、ドイツ語を自分なりに少しずつ学ぶことができるようになりました。やがて、友人達から「以前は全然ドイツ語を話すことができなかったのに今は違う！」と褒められるようになり、私は心の底から嬉しいと感じたことを覚えています。しかし、一方で授業では大抵の場合、先生が話すことや授業の内容をなかなか理解することができず、授業の度に日本でドイツ語をあまり勉強してこなかったことに対して後悔ばかりしていました。このような辛い気分を味わうことも多い留学生活でしたが、日本から遠く離れたドイツで、今まで体験したことのない様々なものに感動することも度々ありました。

まず、私は大の動物好きなので、ドイツでウサギやリス、ハリネズミのような可愛らしい動物を日常の生活空間の中で身近に発見するたびに喜びを感じ、日本ではペットショップでしか見られないようなこれらの動物を自然の中に残しているドイツに、尊敬の念を抱かざるを得ませんでした。また、ドイツ北西部の町オスナブリュックである教会を訪れた際には、その中庭の墓地に住みついた野生のミミズクの親子を見ることができました。その上さらに、中庭を囲む回廊で子供のミミズクとばったり出くわし、お互いに慌てふためいて逃げたという信じられないような体験をすることもできました。

ドイツには美しい建物が数多く存在しますが、私は市庁舎のような大きな建物が夜にライトアップされた姿を見るたびにその美しさに心を奪われました。私が初めてハンブルクを訪れた際、夜の光の中で堂々と建っている市庁舎の美しさに驚き、しばらくその場から動くことができませんでした。他にも、ゲッティンゲンで度々見る機会のあった夜の市庁舎と「ガチョウ番の娘リーゼル」像も美しい記憶として私の心の中に残っています。そして、ドイツでしか見ることのなかったカラフルに彩られた木組みの家々を見るときは、「さすがメルヘンの国だなあ」とロマンティックなドイツに感心しました。

ドイツではひとりで電車に乗って様々な街に出かけましたが、困って

いるときにはいつも親切な方々が助けてくれました。ハンブルクへ向かおうとしていたある日のこと、乗換のために降りた駅で普段ハンブルク行きの列車が来る番線にその列車が来ないことを知り、「どの番線から電車に乗れば目的地に到着するのだろうか？」と途方に暮れていたところ、あるご婦人が遠くからやってきて「ハンブルクに行きたいの？」と私に尋ね、私の“Ja”の返事の後に、別の番線に停まっていたハンブルク行きの列車の前まで連れて行って下さいました。また、カッセルに行こうと電車に乗ったものの熟睡してしまい、何人かのご婦人方が終点のカッセルに着く直前に心配して起こして下さいました。このような非常に親切な方々に助けて頂く機会が何度かあり、そのたびに人々の優しさに心を動かされました。

現在、私は日本でドイツでの出来事を思い出していると、「日本ではできないような体験ができて本当に良かったなあ」とつくづく思います。様々な国から来た友人たちに巡り合えたことやドイツでの様々な体験は、私の世界を広げてくれた気がします。そして、ドイツでの留学を終えた今、ドイツ語の能力を思うように伸ばせなかったことには悔いが残る一方、国籍の違う様々な人々との交流の中でコミュニケーションの能力は少し向上したと感じています。将来再び海外で活動する機会があればぜひ参加してみたいと思います。また、中途半端に終わってしまったドイツ語の学習をこれからも続けてドイツ語を使いこなせるまでにならなければ、と決心を新たにしています。私は今、「ドイツ留学は私が日本から外の世界に踏み出すための第一歩だったんだ!!」と考えています。